



# 統合失調症を患う母とともに生きる子ども

## ～ゆりの日常～

革靴 —16歳—



松岡園子

「忘れてた……」

部屋に入ったゆりの足元には、襟に折り目がしっかりと付いた白衣が畳んで置かれている。ゆりの働く給食会社では、月曜から使っていた白衣を毎週土曜に持ち帰って洗濯することになっている。

ゆりは帰宅してすぐに自分の部屋がある2階に向かったが、白衣を見つけると1階に駆け下りた。日が長くなってきているから、夕方の6時でも窓からの光で階段を進むことができる。台所の明かりを確かめて、戸をゆっくりと引く。

「ただいまあ、白衣、洗ってくれたん？」

「明日、持っていくんと違うの？」

ダイニングテーブルの前で粉薬の袋を口元にあてていた夏子の手が止まる。

「そうやけど」

今日の日曜スクーリングのことが気になっていて、朝のうちに白衣をリュックから出すのを忘れていた。頼んでなかったのに。1年前の夏子の姿からは考えられないことだ。

ゆりと夏子が2人暮らしになったのは、祖父と祖母が立て続けに亡くなった5年ほど前からだ。その頃から、夏子が誰もいない部屋で独り言を話すようになった。ゆりには見えない誰かと話すこと以外、何もできなくなってしまった夏子と、小学校を卒業したばかりのゆりを見かねた親戚は、神戸で暮らしていた2人を奈良の自宅へ引き取った。まもなく、ゆりは児童養護施設に入所し、夏子は様子を見て入院するかもしれないと聞かされた。夏子と離れて暮らすことへの同意ができないまま、児童養護施設へ入所したゆりだったが、夏子と暮らしたい一心で施設を数回抜け出した。その後の話し合いの末、夏子と神戸の家へ戻ることができたが、独り言を話し、家事もできなくなった夏子との生活は大変なことが多かった。親戚から見放されるような形で戻ってきたため、身内に頼ることはできなかったが、地元の友達やその家族、近所の人達が支えてくれたおかげで苦しい状況を乗り切った。ゆり

は中学卒業後、働きながら定時制高校へ通う道を選択し、夏子も福祉作業所に通うようになり、大変だった状況も落ち着いてきたように感じていた。

「学校はどうやった？」

空になった薬袋を半分に折り、椅子から立ち上がった夏子と目が合う。いつもより、背筋がまっすぐ伸びているように見える。

「今日は体育があってん。なんか日曜スクーリングがあったら、休む間ないわ」

ゆりは、夏子が座っていた椅子の向かいに腰かける。

「その分1年早く卒業できるんでしょう？」

「そうやけど、忙しいわ。通信制ってレポートもあるし」

「4年でもよかったんと違うの？」

夏子とこういう会話をしていると、5年前のことが嘘のように感じられる時がある。同じ人なのに、こんなに変わるものなんだろうか。その日調子が良いか悪いかと毎日恐れていたことも、幻だったように感じられる時がある。それとは対照的に、今の自分の生活を自分で選び、創ってきたことは生々しく感じられる。

「3年で卒業がいい。通信制の単位を合わせたら、定時制でも昼の子と同じ時に卒業できるし」

1年でも早く卒業したい。卒業して、もっと働きたい。

中学生の時よりも選択肢が格段に増えた気がする。働くかどうか、どこでどれだけ働くか。学校に通うかどうか、何を勉強するか。

「全然、家におらんよなあ」

昼の仕事と夜の学校、日曜のスクーリング。中学校の時みたいに、気分の落ち込んだ夏子のことが心配な時があっても、家に居られないことも多い。でも、なんとかなっている。

「あ、昼間にね、屋根の修理した方がいいって言う業者の人が来たのよ」

夏子の声が低くなった。

「え？ なんて？」

「屋根を見させてくれって言うから、上がってもらったんやけど、傷んでるところがあるらしいのよ。修理してもらおうかと思って」

「で？ どうしたん？」

「仮契約書にサインしたよ」

「いくらかかるん？」

「50万ぐらいかかるって」

「えー！ それは高すぎるんと違う？」

こめかみのあたりが熱くなる。

「ちゃんと調べたん？ すぐサインしたらあかんって！」

自分の声が大きく乱暴になっているのがわかる。

「でも、すぐに修理が必要って」

「実際に見たん？ 連絡先教えて」

夏子が隣の部屋から白い封筒を持ってきた。中のクリアファイルには、確かに金額が書かれている。さっきは熱かったこめかみが、今度は氷を当てたようにしびれてくる。時計を見ると、もうすぐ7時になるところだった。

「工務店か。もう閉まってるかな、明日かな」

ゆりは、受話器を取り、書かれている電話番号を指でなぞりながらボタンを押していった。契約書にサインをしたから、もう決まってしまうのだろうか。払わなくてはいけないのだろうか。ボタンを押す手が震える。

呼び出し音が3回、4回、5回……と耳の奥で鳴り続ける。あと1回鳴らして切ろうかと思った時に、呼び出し音が途切れた。

「あ……今日、屋根の修理で来てもらった吉田です」

「あー……はいはい、吉田さんね、どうしました？」

想像していたよりも高くて細い、男性の声がした。

誰も電話に出ないと思っていたから、次の言葉が出てこない。

「えっと、母が契約書にサインをしてしまったみたいなんですけど、ちょっと病気で……。よくわかっていないと思うので、契約を取り消すことはできますか？」

背中にじわりと汗を感じる。怒られるんじゃないだろうか。太鼓をたたいているように胸で大きな音が鳴っている。

「え？ 病気なの？ ちゃんと話してくれたけど」

「ちょっと……自分で考えるのは難しいんです」

なんて説明したらよいかかわからない。夏子だって今は回復してきているのだから、話している工務店の人も違和感を感じなかったはずだ。それなのに、子どもの声で電話をしてきた自分の話を信じてもらえるのだろうか。

「そうなの？」

沈黙が30秒ほどあったように思う。

「他に話ができる人はいないの？」

こんなこと、誰に相談するんだろう。誰かに相談して決めてもらうことなんだろうか？ 周りの人の顔がまぶたの裏に思い浮かんで消える。考えているけれど、言葉が出てこない。早く何か言わないと。

「うーん、まあ……そっか、わかりました。じゃあ、今回は契約をいったん取り消しますから、お話できる人がいたら、こちらに電話もらえますか？」

ため息の混じったような困ったような声に聞こえたが、取り消しますという言葉で、ゆりの頭の中にあった大きな塊がずっと溶けたような気がした。目の前に覆いかぶさっていたグレーのカーテンが一気に開かれ、白い光が差し込んできた。

「すみません……」

受話器を置くと、ゆりは吐く息とともにその場にへたり込んでしまった。膝の内側から冷

たさが伝わってくる。背中の方からは、夏子の視線を感じる。

「取り消してくれるって」

ゆりは背中を向けたまま言った。

「屋根は大丈夫なの？」

「わからんけど、今のところ、何も困ってないやん？ たまたま通りがかりで来ただけやと思うし」

「そうかな……」

「これからは、修理の人とか、セールスの人が来たら『家族に相談します』って言って、いったん帰ってもらうようにしたら？」

夏子は調子も回復してきてまともに話ができるようになったが、何でも信じてしまったり、恐怖心がおおられて、お金がかかることでも契約してしまうのでは困る。

「昼間、私は家におらんしなあ……」

ゆりはしばらく工務店の契約書を見つめていた。

セールスの人が来て、夏子がひとりなのが困る。来た時にもうひとり誰かがいたら……。

「あ、そうや」

座り込んでいた台所の床を勢いよく押して立ち上がると、ゆりは玄関の方へ向かった。外はもうすっかり暗くなっている。木製の下駄箱の扉をスライドさせ、1番下の段をのぞくと、黒くて大きな革靴の先が顔を出している。引っ張り出して甲の部分に息を吹きかけると、ふわりと埃が舞った。持ち上げると、見た目よりも重い。

ゆりは革靴を、たたきの真ん中へ置いた。

「それ、お父さんのよ。出しとくの？」

背中の方から夏子が訊く。声の大きさから距離を感じる。

「これ置いといたら、家に男の人がおるって思われるんと違う？ この家に女2人だけって気づかれん方がいいやん」

おじいちゃんが守ってくれるって。

お金を稼げば増える。働いてお金を増やすことは楽しい。

でも、稼いでいるだけではダメなのか。

お金を守ることをしなければ、一瞬で無くなってしまうことだってある。お金持ちになりたいわけじゃない。でも、お金が無いことで、誰かのお世話になったり、言いなりになったりするのはいやだ。

そうやんね、おじいちゃん。

ゆりは、革靴の内側の縁を左右いっぺんにつまみ、夏子の青いサンダルの横に置き直した。

※この物語は実際の体験と、それを探求する虚構の物語をもとにしています。

実在の人物及び団体のプライバシーに配慮し、作中では架空の名称をあてています。